

氏 名	こばやし まさこ 小 林 正 子
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 甲 第 254 号
学位授与の日付	平成 13 年 7 月 26 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	工芸科学研究科 機能科学専攻
学 位 論 文 題 目	C. F. A. ヴォイジーにみられる伝統性と近代性に関する研究 (主査)
審 査 委 員	教 授 日向 進 教 授 古山正雄 教 授 西村征一郎 神戸女子短期大学 教 授 河邊 聡

論文内容の要旨

本論文は、自らは伝統性の重視を訴えながら、近代の建築批評家たちからは「近代建築の先駆者」と位置づけられた英国の建築家 Charles Francis Annesley Voysey (1857-1941) の作品や言説を通して、近代という時代を生きた建築家が求めていた近代建築のあり方について論じている。

本論文は、序以下 4 章で構成される。

序では、本研究の目的と方法を明らかにするとともに、これまでなされてきたヴォイジーが建築家としての地位を築くまでの経歴を示している。

第 1 章：「ヴォイジーの設計思想に対する近代性評価」

近代の建築批評家たちが見出したヴォイジーの近代性としての「装飾における簡潔性」と、「歴史的先例」としてのゴシック様式の原理を肯定し簡潔な装飾こそ「本物の装飾」であるとするヴォイジーの設計思想について、比較、検討している。

第 2 章：「ヴォイジーの設計思想にみられる伝統性」

英国の伝統的様式であるゴシック様式の原理に基づいたヴォイジーの設計思想および伝統性の重視による近代建築批判について論考している。また、ヴォイジーはなぜ近代性に眼を向けず、伝統性を保持し続けることになったのか、ヴォイジーの考える伝統とは何かについて考察している。

第 3 章：「ヴォイジーの住宅作品に対する近代性評価」

ヴォイジーの代表的な住宅作品である自邸「オーチャード(The Orchard)」を通して、近代建築批評家たちのヴォイジーへの近代性評価と、「オーチャード」においてヴォイジーが目指していたものとの間に生じていたであろう齟齬について論証している。

第 4 章：「ヴォイジーの住宅作品にみられる伝統性」

地域的な伝統性を重視するヴォイジーは、伝統的住宅形式の屋根形態の重要性を説くとともに、接客空間を排除した家族中心の快適な住生活を目指そうと努めた。本章では、ヴォイジーの住宅作品における屋根形態と室名使用について分析し、近代における中産階級の住宅に示した新たな方向性が、近代住宅の基本となる平面構成を確立したことを明らかにしている。

結では、近代建築批評家によるヴォイジーの近代性評価とヴォイジーの設計思想との間に生じ

た齟齬の論証を通じて明らかとなった、ヴォイジーの近代に対する姿勢について論じている。
資料として「ヴォイジー建築作品リスト」を付している。

論文審査の結果の要旨

従来のヴォイジーに対する評価では、その近代性にのみ多くの眼が向けられた結果、近代建築の先駆者の一人として位置づけられてきた。ヘルマン・ムテジウス（1861－1927）、ニコラウス・ペヴスナー（1902－83）ら近代建築批評家たちは、ヴォイジーの設計思想にみられる「装飾における簡潔性」および「歴史的先例からの脱却」に、また住宅作品にあらわれる「ホール型」の平面構成に近代性を看取する。だがヴォイジー自身はその評価を強固に否定し続けた。作品からも確認されるように、ヴォイジーは伝統性や地域性を重視したが、単なる伝統主義者ではない。彼が近代に向けて示そうとしたのは、装飾や歴史的な先例を完全に排除したものとは異質な建築であった。視覚的な満足から解放され、より簡潔なものから得られる真の豊かさのためのものこそ、「本物の装飾である」とヴォイジーは主張する。本論文は次の3つの論点を軸として、ヴォイジーが近代建築史の上に果たした役割について新たな評価を試みている。すなわち、第1は、ヴォイジーが伝統性の重視を説くにもかかわらず、なぜ近代建築批評家たちによって「近代建築の先駆者」という評価が与えられることになったのか、第2は、従来のヴォイジー評価ではあまり重視されることのなかった伝統性という一面を取り上げることによって、ヴォイジーの設計思想への理解を深めること、第3は、ヴォイジーの目指していたものと近代建築批評家たちによる評価との齟齬について、である。

申請者は1997年10月から99年9月にかけてロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンに留学、文献や図面等各種の資料調査・収集、建築調査や関係者のヒヤリングを積み重ねた。そしてヴォイジーの建築作品（家具、金属工芸品などを含む）、文献、言説などに丹念な分析を加えて次のように論じている。ヴォイジーが目指したのは、「新しいものは何もないが、新しい考え方と感覚だけがある」建築であり、「近代建築」という新しい様式を目指したものではなかった、と。またヴォイジーの設計思想の根源には常に伝統性重視の思想があり、伝統的様式を参照しつつ、それを新たな視点で解釈し、近代という様式から解放されて「自然な特質」を表現する自由をもつことによって、近代への新しい道を開こうとしたという点において、ヴォイジーに対する新たな評価を与えている。

資料として付された210点を数える「ヴォイジー建築作品リスト」は、申請者によって相当数が新たに付け加えられた。今後のヴォイジー研究の基幹をなすものとして学術的価値は高い。

本論文は、審査を経て掲載された2編の論文、その他をもとに構成されている。

- ・小林正子：「C. F. A. ヴォイジーの装飾における簡潔性の思想について」『日本建築学会計画系論文集』第544号、pp. 295－301、2001年6月
- ・小林正子：「室名使用にみられるC. F. A. ヴォイジーの伝統性に依拠する設計思想」『日本デザイン学会論文集デザイン学研究』第48巻1号（通巻145号）、pp. 57－66、2001年5月